

新・今日の作家展 2022

New "Artists Today" Exhibition 2022

世界をとりとめる

We Catch
the World

大崎清夏
OSAKI Sayaka

小林達也
KOBAYASHI Tatsuya

古山結
FURUYAMA Yui

横浜市民ギャラリー
Yokohama Civic Art Gallery

ごあいさつ

「新・今日の作家展」は、横浜市民ギャラリーが開館した1964年から40年にわたり開催した「今日の作家展」を継承した展覧会です。毎年テーマを設けて同時代の作家の作品を多角的に紹介し、その表現を考察しています。

今年は「世界をとりとめる」を副題に開催します。世界とは、地球上のすべての国家や地域を指すとともに、自分が認識している社会や世の中、また自分が自由にできる特定の範囲も意味します。いずれの意においても、世界の成立にはそれを認識する自分という主体が不可欠な一方で、自分自身がその構成要素の一つであるといえます。そしてまた、世界は時とともに移ろい変化し続けています。本展では、そのような世界のひと時に眼を向け、制作する3名の作家を紹介します。

詩人の大崎清夏は、平易かつ印象的なことばを用い、自身の体験や思いを反映しながらも、読み手個々に情景や記憶を喚起させるような作品を発表しています。小林達也は、描く行為の中で生まれる色面や形象から受ける自身の内面の動きを画面に還元し、カゼインテンペラ等を用いた色彩豊かな絵画を制作しています。日本画材で制作する古山結は、矩形にとられない支持体の制作や描写、時に絵具の削り取り等の工程を通じて、日々の物事や出来事を整理するように表します。彼らの作品に接し何等かの揺動を得ることが、私たち自身の世界の再認識へと繋がるかもしれません。

最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた、大崎清夏様、小林達也様、古山結様、ならびにご協力いただいた関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

2022年9月
横浜市民ギャラリー

謝辞

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

大崎清夏　小林達也　古山結

小山衣美　田中龍也　永井玲衣

Cat　栗原元　玄宇民　毛利悠子　森田彩子

世界をとりとめる

齋藤里紗

「世界」という言葉は大仰だ。けれども私たちは、自分の周囲にある物事や、身体を通じて経験してきたこと、想像できる事柄の範囲について「世界」を用いる。この場合の「世界」は何かを認識したり感受したりすることが前提になっているため、主体なくして世界は存在しないといえる。そうすると主体となり得る存在の数だけ世界は存在しているし、それぞれの主体が認識することのできる世界の範囲は限定的なので、すべてを包括する「ひとつの全体としての世界」¹は存在しないということになるだろうか。世界は個々に独立するとしても、世界同士の重なり合いや互いの関わりはあると思いたい。また、主体は時間とも共にあり変化を免れないため、主体が成す世界も揺らぐし、移ろう。世界はたくさんあり、不定形で、“とりとめがない”。

溢れるような不定形の色彩が、眼前を覆いつくす。画面上には具体的な何かを連想させるような形態はなく、重なり合う鮮やかな色面の中を、時に踊るようにクレヨンや色鉛筆の線が走る。小林達也の作品について考える際、この度のインタビューで出てきた「音楽」というキーワードがよく馴染む。耳から脳に瞬時に届いて刻まれる、心地よい音が残すイメージと似たものが、小林の絵画からは感じられる。夥しいともいえるたくさんの色彩それぞれが固有の要素として画面上にありながら一体となって作品となる様は、一つの音と曲のような関係にも見えてくる。そうした作品が完成する背景には、絵を描くことやひらめきといった、自身の内面にも向けられた根源的で哲学的な疑問から展開される思索の時間と、顔料を混ぜてつくり、その絵具を画面におく様々な動作、また次の「一手」²を考える制作上の行為や推敲する時間とが互いに影響を与え合い、積み重なったものがある。こうした現象は小林だけに特異なものとはいえないだろうが、具体的に描く対象を持たない小林にとって、自らの意識と無意識との境界を探るような対話の累積こそが制作時における小林の世界であろうし、その世界が反映されたものとして作品があるといえるだろう。考えた末に選び、時に感覚的に塗られた色彩一つひとつに、小林の世界、時間が“とりとめられて”いるといえる。小林が最近読んで面白かったと勧めてくれたのは、全卓樹の『銀河の片隅で科学夜話』（2020年、朝日出版社）だった。宇宙や昆虫、数や統計等、普段意識しないが確かに存在するものたちについてやさしく語る一冊で、小林が自身にも等しく向ける、分からないものに抱く飽くなき好奇心、分からなさを楽しむ態度に共通するものが感じられた。

日本画材を用いて制作をする古山結は、母校の東京藝術大学で日本画科の助手としても勤めるが、日本画という枠組みや概念に必要以上にとらわれない立場をとる。「描くこと」と「制作」との差異―古山のいう“ずれ”への着目、作品と作家を介する身体性等は、博士論文³においても論じられたテーマで、現在も古山はこれらの疑問や命題を内在させながら日々作品に向かっている。古山は制作過程で生じる行為を、必ずしも意識下より出てくるものではないと考える。また、描くものは自らの日常で得た様々な気づきや感覚が基となるというが、そこでもやはり予め主題を定めることはせずに、どこかに委ねるような態度が一貫する。現在の作風において（古山の作風は今のところとても早いスピードで変遷している）、和紙や下地材を塗ったパネルの上に主に淡い色彩で描かれた抽象性の高い形象には、日々眼にしたものや、ふとした瞬間の僅かな感情の揺れ動き等、古山の世界の一端が“とりとめられて”いるように見受けられる。その中に垣間見える人の形の表出について古山は、日常で物事を受容する自らの身体があるためではと語る。自身でも具体的な他者でもない概念としての人体は、手や足等一部しか確認できないことも多い。人の身体という明確

な意味を持ち幾度も登場するモチーフが、今後どのように展開されるかはとても興味深い。近年よく出てくるようになったという支持体や画面の削り取りや引っ掻きについては、作品を構成する物質への積極的な介入であり、画面上にしばし見える絵具の粒子と共に、作品がモノから出来ていることを如実に示す。古山はまた、自らの作品を言葉、つまり他者に何かを伝えるものと言い表す。“ずれ”を内包したその言葉は、全てのものが明瞭に分からず曖昧さを抱える、私たち他者の世界に飛び込んでくる。

大崎清夏は言葉で表現する詩人だ。詩人の出品は当展覧会の歴史において初めてとなる。丁寧に編まれた大崎の詩の中の言葉は、私たちが慣れ親しんだ平明なものが多いが、なぜか心に引っかかる。目で文字を追いながら、自然と呟き噛み締めたくなってくるような言葉が連なる背景には、幼少期に絵本の音読に親しみ、伊藤比呂美の詩の朗読に触れその声とリズムに感銘を受けて詩人を目指した大崎が⁴、詩を声に出して読むことを大切にしているからだろう。そして、個々の読み手が自分事として受け止められる余白のようなものが、共感を呼ぶ。詩の中に綴られるのは大崎の体験したものや想像したもの一大崎の世界であるのにも関わらず、なぜか脳裏の奥にしまい込まれ忘れていた些細な記憶や、その印象一読み手の世界が呼び起こされる。これは、捉えどころのないものが少しクリアに見えたり聞こえたりするための、ヒントを貰ったような感覚でもある。数カ月前に初めて対面した朗読イベント後に大崎は、「自分が忘れたくないものを留めておきたい」と話してくれたが、大崎の世界への接し方が詰まっているような台詞に感じられた。大崎は音楽や映像等、他の表現分野とコラボレーションして詩を発表することも多く、そうした場面における詩は様々な要素と組合わされ、大崎のいうように本を読むのとは違う受容体験となる。今回初めて「展示」される詩《私は思い描く》は、昨年5月よりtwitter上で発表されてきたものを再構成するもので、1年以上かけて少しずつ積み上げられた詩が一堂に集約される。誰もがアクセスできるWebの中、SNSの規格の下で、時と共に変遷する大崎の世界を反映してきた詩が、会場に“とりとめられて”、見られ、読まれる機会となる。

彼らのふるまいは、一見自分の世界に潜りこんでいるように見えるかもしれない。しかし、他者やその世界が存在を意識すること、分からないものも含めて自分の世界をそのまま受けとめ、掘り下げ示すことの両立が、表現の背後に共通する。私たちが単独で体験できる世界の範囲は広くない。しかしながら他の世界に興味を持ち、そこへのアクセスの試みを繰り返すことで、私たち一人ひとりが成す世界も拡張し、相互に接近ができるようになるのではないだろうか。そんな夢想をしながら、タイトル(言葉)を一つの頼りに言葉化できない絵画“世界”と、言葉で綴られた詩の“世界”に触れて貰えたらと思う。

(横浜市民ギャラリー学芸員)

-
- 1 マルクス・ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』(2018年、講談社)より
2 吉田成志「ヒヤヒヤワクワクと対局する作家」2021年 小林達也個展「大きな線 もしくは星」(GALERIE PARIS)パンフレットより
3 本冊子p.12参照
4 花椿「今月の詩」【詩のレッスン#5】歌人・穂村弘と詩人・大崎清夏対談「短歌と詩を書くこと、そして今月の詩について 2021.8.16」参照
<https://hanatsubaki.shiseido.com/jp/poem/14234/> (最終アクセス: 2022年8月25日)

その他、本紙掲載の各作家インタビューを参照した。

OSAKI Sayaka 大崎清夏

けさ、大きな雷鳴にびっくりして目が醒めました。
すぐ近所で爆弾が炸裂したような音でした。
本州の北のほうを、線状降水帯が渡っています。
新潟と山形に、大雨特別警報が出ています。
いつもはベッドの隣のキャットタワーの頂上で寝ている猫が
雷から避難して、ベッドの下に逃げこんでいました。

雷は爆弾ではないから、私は猫を安心して放っておくことができます。
猫も、雷が収まってしばらくすると、何事もなかったみたいに出てきます。
「おはよう」と私は猫に言います。

世界は嫌になるほど言葉でつくられていて、
言葉はいま、地球上の人類と同じように過密です。
言葉はいつも「思い描きなさい」と私たちに命令します。
私たちはなかなか断れません。言葉ってほんとうに勝手です。人を疲れさせます。
でも……言葉にそう言われると、ついつい思い描いてしまいます。

「おはよう」という言葉があつてよかったなと私は思います。
その言葉によって、私は猫に話しかけることができるから。

雷が遠くで鳴るように、
猫がしっぽを振るように、
あんまり言葉みたいにはみえない言葉で、
ずーっとあなたに話しかけていたいなあと思います。
いつかあなたが、私が話しかけていることに気づくまで、
いえ、いつまでも気づかなくても。
私たちの、言葉と魂の健康のために。

2022年8月4日 雨



大崎清夏《パサージュ》2021年／アクリル板、カッティングシート、木材／デザイン協力:Cat



大崎清夏《踊る自由》2021年 左右社／ブックデザイン:大島依提亜

大崎清夏 | インタビュー

一 詩をつくるようになったきっかけ

子どもの頃からずっと、ものを書く人になりたいと思っていました。絵本を読んでいた頃は絵本作家に、小説を読むようになってからは小説家になりたかったので、大学でも文芸専修で小説の書き方を勉強していました。でも大学を卒業して会社員として働き始めると時間がどんどんなくなり、長いものを集中して書くことができなくなっていきました。それでも書くことを続けていきたいと思った時に、短い言葉の集まりみたいなものがたくさん生まれてきて、今考えるとそれが詩を書き始めた最初でした。27歳くらいの頃、友達が詩人の伊藤比呂美さんの朗読会に連れていってくれて、詩のリズムのもつ力に大きな衝撃を受けました。それで「自分もこういう詩が書けるようになりたいな」と思い、その時に多分初めて現代詩をやろうとはっきり意識したと思います。その後、詩の雑誌『現代詩手帖』と『ユリイカ』に投稿を始めました。最初の頃、『現代詩手帖』ではなかなか選んでもらえなかったのですが、その後伊藤比呂美さんが『ユリイカ』の投稿欄の選者になられてそちらに送り始め、次第に選んでもいただくようになりました。その時期は本当に文通みたいな感じで、個人的にお便りをもらうような気持ちでいつも投稿欄を読んでいた。

一 詩と自身の関係性

どうやったらこの先も言葉とずっと遊んでいられるのだろうと考えました。多分その答えが私にとって詩を書くことになったんだろうなと思います。生きていて色々辛いことがあっても、私の場合は言葉の世界がシェルターのようになってくれると感じます。詩を書くことは、自分にとっての自由とは何なのかを考え続けることにもなっています。

一 遊ぶこと

大人になるとどんどん遊ぶ時間が減り、遊ぶことは怠けることのように言われがちですが、もっと大人が遊んだほうがいいと思っています。遊ぶことから生まれる発想や、物事の展開等は、遊びがないところから生まれるものよりも大らかだったり豊かだったりします。毎日を気分よく生きるという切実な問題に、私たちが遊ぶことが直結している気がして、どうやってこの先も遊んでいこうかなと考えています(笑)。

一 詩で表してきたもの

詩は、何かを伝える言葉でなくてもいい言葉だと思うのです。世の中は役に立つ言葉で構成されていて、色々なメッセージ

があります。メッセージは人を方向付けるもので、何か人を掴んで押し出すようなところがあると思います。詩はメッセージとは違って一そういう詩もあると思いますがー「どこにも別に行かなくていいよ」という無力なところ、無力なままで人を揺さぶるところがいいと思っています。

これまで色々なことを書いてきましたが、共通する言葉をあげるとまずは多分「生活」になると思います。それは人間の生活だけではなく、動物の生活だったり、植物の生活だったり、人間が預り知らないようなところにも色々な生活があり、何かがあるということがいつも面白いなと感じています。そこにはどういうサイクルがあるんだろうと想像したり、妄想したりして書いたりしていることが多い気がします。それからその一つの生活が限界を迎えて苦しくなった時に、そこからどうやって自由になっていくかということも、もう一つ大きなテーマとしてあるように思います。

一 「世界をとりとめる」

大学の講義ではよく学生さんに「自分だけの発見を大事にしてください」と話しています。万人に伝わる分かりやすい感動だけではなくて、他の人は誰も面白いと思わないかもしれないけども、自分にはこれが重要な、重大な事件に思える、そういうものの発見が一人の人に与える影響がとても大きいと思います。そうした自分だけの発見を大切にすることと、世界をとりとめるということは同じようなことなのではないでしょうか。そういう発見をないことにできる方が、社会的には生きやすくなると思うんですよね。発見にいちいち囚われていると遅くなり、社会のシステムには乗り遅れていくので。でも、それがなくなるとどんどん辛く、苦しい、ただ波に乘らされているだけの生活になってしまうのではないかという危機感があるような気がします。

一 詩を展示すること

展示室で詩に向かい合うのは身体的な負荷がかかるぶん、



大崎清夏《E-LANDイズム a.k.a. 江ノ島縁起異譚》2022年／カットティングシート ©藤沢市アーツスペース

貴重な機会だと思います。本はモバイルなので、どこでも好きなところで読めて、寝る前にも朝起きた時にも読めますが、展示で文字を読むのはもう少し別の身体の使い方なのだろうと。まず展示室に来ないといけない。電車やバスに乗ったりして、目的地まで来る身体があります。展示室に入ったら動き回りながら一行一行を味わって行って、出た後も帰り道で言葉を思い出したりします。その言葉はもう手元にはなくて、思い出すしかない。本を読むのとは違う形で、身体を使って読む経験にもらえるといいですね。

一声・朗読

声には、一回音として自分の外に出てそれをまた聞くという運動性があるので、今こうして話している声を自分で聞くことで、自分も理解できるようになるところがあります。だから声に出して読むのは私自身すごく好きで、人の詩を声に出して読むこともあるし、自分の詩をつくる時も最後に声に出して確認する作業をいつもしています。黙読の中で声に出してみたい言葉に出会ったら声に出してみます。声に出すことがもっと当たり前にある状態になれば、それも一つの遊びなので楽しいだろうなと思います。また、自作を作る時には言葉がどのようなスピードで、どのようなニュアンスで語られているのか、自分の中には結構明確な声があるのですが、他の人に朗読してもらおうと全然それとは違う抑揚やスピード感が出てくるので、この人はこういう風にこれを読んだんだなと分かるのが面白いですね。

一 《私は思い描く》

twitterに《私は思い描く》の投稿を始めたのは2021年5月で、コロナ禍がまだ続くことが改めて認識されてきた時期です。でもオリンピックは開催するということで、色々世界が歪んでいる感じがしていました。私は日々のニュースもtwitterで見たりしているのですが、当時はそれが辛くなってしまっていて、でも見ないことにはできないという気持ちもあり、だったらtwitter上で自分が少しでも気分よく生きていくことができるための言葉を残していきたいと思いました。アメリカの詩人が、毎回“i love…”で始まるツイートを詩として展開しているのを見て、これを私も日本語でやろうと。でも次第に思い描くことが自分の中で移り変わっていき、気分がよくなることだけではなくて例えば内戦が起きている場所のことを思い描こうという気持ちが出てくるなど、続けるうちに内容が膨らんでいきました。最近は断続的になって毎日は書いていないのですが、今回の展示のために改めてこれまでの投稿を整理し直すと、もしかしたら新しく思い描くことができるかもしれないので、

おさらいのような気持ちで構成したいと思っています。「思い描く」という言葉を選んだのには、明確な理由があります。小説家のリチャード・パワーズの『ガラテア2.2』という作品の中に、“南へ向かう列車を思い描いてほしい”という一行があり、とても印象的で記憶に残っていました。その原文の始まりが動詞の picture(“Picture a train heading south.”)で、それがまたかっこいいなと。何か突破口がないかなと思っていた時にその言葉がはまったので、使いました。

一 《I/O》

《I/O》は毛利悠子さんのインスタレーション作品で、今回展示する《I/O》をとらえた同名の映像には、私の詩を朗読する萩原慶さんの声も入っています^{*}。絵画の展示や、今回の詩の展示の場合、それらを鑑賞する方はどれくらいの時間を作品に使うのかを自分で決められます。インスタレーションの《I/O》も本来そうした作品ですが、映像では最初と最後の時間が区切られているので、モノたちの動きや、言葉の展開、そういうものを一つのパフォーマンス作品のように捉えて見てもらえるといいのかなと思っています。

一 今後の表現活動

自分自身が色々な場所一遠く、知らないところに行って、そこで見たものや聞いたことに晒される中で書いていきたいという気持ちでやってきました。これからもそういうふうにやっていきたいし、自分が行ける範囲よりも遠くまで届くものがつくれたらいいなと思っています。

※出品作は、隅田川沿いの鉄筋コンクリートのビル4階に設置された《I/O》の12月のある日の模様をおさめる映像詩。毛利の作品を中心に、現場でインスピレーションを得た大崎の詩と玄宇民の映像で作品化した。

2022年7月1日 横浜市民ギャラリーにて
聞き手・編集：斎藤里紗



《I/O》2021年／インスタレーション:毛利悠子／詩:大崎清夏／映像:玄宇民 ©Yuko Mohri / Photo by Kenshu Shintsubo

何かのイメージもなく、感覚と思いつき(“ひらめき”とも言える)を頼りに絵を描いている。「私」を少し横に置いて絵に向き合うと、なんだか画面が求める色や行為が浮かんでくる。根拠のない思いつきの地続き、ずっと遠くに、あるべき姿が不思議と確かにある気がして、それを観察し記録するように手を動かす。

この先が何処につながり、何が見えてくるのだろうか。その中で、わたしは何を思うのだろうか。何があるのか見てみたい。

絵の中で、私は小さい。線が生まれる瞬間や、絵の具の自然な表情に相変わらず驚き楽しんでいる。描くことは不思議だし、「私」も不思議だなと思う。

わたしが、人が、見る見ない、いるいないに関係なく星はある。
それを、私の場所から、注意深く観測し、近づこうと試みる。
触れられようも、確かめようもないものなど関係ない。
そして、どれだけ遠くても関係なくない。わたしたちは、星だろう。
(2021年 個展「大きな線 もしくは星」より)



小林達也《大きな線 もしくは星》2021年／パネルに寒冷紗、建材パテ、カゼインテンペラ、アクリル、鉛筆、色鉛筆、マジック、クレヨン／272.0×240.0cm

小林達也 | インタビュー

ー現在の制作に至る経緯

小さい頃から、絵を描いたりものをつくったりすることが好きでした。自分で何でもつくりたい性格なんだろうなと思います。「美術」というものに出会ったのは、高校の時の美術の先生で、今も活躍されている野沢二郎先生[※]に美術部でもお世話になったことがきっかけです。放課後、先生が準備室で大きな抽象画を描いているのを、何だろうという感じで見ていたりしましたね。大学の時は油絵を専攻していました。何を描こうか探している時に、風景でもないし物語でもないし、何を描きたいのかなと考えるばかりだったのですが、自分の意見等を描きたいのではない。だけど形を描きたい、何かをつくりたいというのがあって。大学院の頃だったか、色だけで《せいせい》という小さな作品をクラフト紙に描きました。その時、色と四角っぽい形だけで一色鉛筆も使いましたが—それだけで絵をつくっていける、絵が生まれるというか、そういうものを自分で見つけた気がしました。でも何を描いているんだろうというのが、ずっと続いているように思います。

ー作品で表していること

作品で表したいことは、絵を描きながら考える中にあるように思うのですが、基本的には何も無いというか。何かを表したい、伝えたいというのはないけど、絵を描きたい。絵を描こうとすると、何かしら色を塗ると次が欲しくなる。クレヨンや色鉛筆で線を描きたくなる。自分のことなのですが、その感覚の不思議が何だろう、何が理由なのだろうと。絵を描くこと自体の不思議さみたいなものを感じながら、また色を塗ったりして、新しい様子が見えてくる。いちいち驚くようなことがあって、それが楽しくて描いていますね。

ー影響を受けた作家

自分でつくりたい、見つけていきたいので、積極的には気にしていないのですが、それでも何名かいます。デューラー等も好きですし、高校の時に美術館に連れていってもらって衝撃的だったのが、ホルスト・ヤンセン。実際に表現としては全然違いますが、とても印象に残っている作家です。

ー色彩

色は好きです。でも、心地よいだけというのは嫌だったりしますね。色彩は鮮やかなものが好きだし、好きな組み合わせみたいなものはあるのだと思いますが、割とどれも同列に

扱っています。カゼインテンペラは顔料とメディウムを混ぜて絵具をつくるのですが、顔料自体を混ぜるので色数はたくさんあります。

ーカゼインテンペラ

大学生の時は油絵具を使っていたのですが、粘り気や乾きの遅さにしっくりこないものがありました。麻布や綿布に描くとねちねちした強度を求める抵抗感があって、画材の方が求めてくるような気がしました。麻布を塗る時も、その目が気になってそこを埋めないといけない、筆や絵具を置いてマチエールを何とかしなければといった思いに駆られ、そういうものは私はいらないという気がしました。またヤンセンもそうですが、色鉛筆や鉛筆の素描的な表情に惹かれるところがありました。そうした学生時代に、基底材や絵具、オイル等色々と実験しているなかで、カゼインテンペラを見つけました。授業でも卵テンペラを習いましたが、カゼインテンペラは紙にも描けるし、色鉛筆のような鮮やかな線も引ける。水性なので綺麗な色面がつくれるところが自分に合っていたのだと思います。水加減で変えられますが水っぽい絵具なので、絵皿につくって主に支持体を寝かせて描いています。垂れていく様子はパネルを立てて描いた時のもので、上下も基本的にあまり決めずに描いていますね。

ーコラージュ

描く中で、表現としても表情としても、素材としても少しずつ自由になれる、そういうものが欲しくて取り入れました。紙を貼ってみたり、使い古した身近な布を使っていたりします。積み重ねて自分の思うように構築していくのもかっこいいし、そういう方向もありだと思いますが、硬くなるというか。そうではなく楽な、自由な自分らしい形、広がる方に進めたらなと思って色々試しています。



小林達也《星がある》2021年／パネルに寒冷紗、建材パテ、カゼインテンペラ、アクリル、クレヨン、色鉛筆／272.0×362.0cm

※1957年茨城県生まれ。1982年筑波大学大学院芸術研究科修了。現在明星大学教授。

—タイトル、言葉

言葉は苦手でいつもなかなか出てこないのですが、絵を描いている時に長い期間絵に向き合っていると、やっぱり何か考えてしまいます。絵を描くこと自体について等色々ですが、そのうちにじっくり言葉が着地します。その言葉は書き留めておいて、他の時にもそれを基に考えを進めます。絵に使う色もその時の思いつきなのですが、思いつきって不思議だなと。その時に捕まえないと、ないことになってしまう。見ている中で浮かぶ色と、その時に浮かぶ言葉。同じように感じます。絵を描くのと、考えるのが同時にあるのが面白いなと思っています。

—確かめられないもの

確かめられないからないかという、そうでもない。むしろ分かっているようなものの方が少ないのではないのでしょうか。描くことも自分で判断し、自分で考えているし、作品は自分だけが行動していることの痕跡なのですが、感覚なのか、何かが開かれるような感じがして描ける時があります。

—観察、星

自分は何をしているか、何を描いているかをいつも見つけ、観察しているように思います。昨年のギャルリー・パリの個展「大きな線 もしくは星」(2021年10月9日～21日、横浜)でタイトルに使った〈星〉などは、いつもの自分を観察することから少し離れて、作品がなりたいたい様子や欲するもの、なるべき姿といったものが遠くにあるように感じたところから、出てき



小林達也《庭》2013年／パネルに寒冷紗、建材パテ、カゼインテンペラ、コラージュ、アクリル、クレヨン／249.5×220.0cm

た気がします。

星は見つけるとそこから広がるイメージがたくさんあります。空の星の存在については不確かさ、確かめようのなさがありますが、皆そこを疑わない。星同士の関わりもあります。すぐ離れている星と星でも、お互いに引き合っている、バランスが取れている位置にあったりする。制作時、色を置く時に感じるものにも、バランスという単純すぎますが、響き合いがある。全体の中でやっぱりここにあると思ったり、色彩一つひとつが星のように感じたりします。作品自体も星であるといいなと思います。描いていると「自分も星かな」とか、「石ころも星かな」とか、思索が広がります。社会や人の関わりでも、分かり合えない、距離が遠くて当然なところがありますが、時にすれ違うことの奇跡もあり、ぐるぐるそれらについて考えてしまいます。

—「世界をとりとめる」

とりとめない世界でとりとめる、面白いですね。大胆で頼りないような。以前、魚ならば水中にいるので水で皆繋がっていて、何なら共通意識もありそうで、実は繋がりが合っている世界なのではと考えました。地上でも空気で繋がっていたりするのでしょうか。先程の星もそうですが、それぞれの世界はほとんど触れ合うこともない。自分の知り得ることのできる範囲は狭いものですが、遠くで他の星が光っているなど感じるだけでも、意味があるような気がします。作品に《庭》《庭とする》といったタイトルもつけたことがあります。何とか自分の手の届くところだけでも気に入るように、いい形にすることを目指すのは、なかなか無謀だなと思います。だけど何とかしてみるというイメージから《庭とする》というタイトルが出てきました。どの作品もそうですが、どこかで無茶をすることがあります。

—音、音楽

音楽っていいなと思います。音はその場で再生されたものでも、生まれたものが直接伝わって、そこで好き嫌いとか、綺麗だなとか、感じる事ができるので。絵だとどうしても意味や理由を考えたくくなります。絵でも本当は、色の組合せやバランス、位置、そういうものが何か綺麗だなと魅力に感じたりしているのに、そこに説明を求めてしまうところがあると思います。意味や理由がなくても魅力的、いい形というのはいいですね。そうした作品は画面としても音楽的なものかもしれません。

2022年7月14日 小林達也氏アトリエにて
聞き手・編集：齋藤里紗

FURUYAMA Yui

古山結

分かっていることが少なく、言葉にするのにいつも苦労しています。これを書いている段階では、私にはまだ展示の全貌が見えていません。それでも、制作過程の只中にある今のこと、日々のこととお話することはできます。

私は働いて、制作をして、毎日を過ごしています。

最近は刺されるような日差しの中を歩いて、制作場所へ向かっています。何かに触ったり、触られたりします。人に会ったり、会えない人のことを考えたりします。日々が私の身体をすり抜けるとき、私が日常を駆け抜けるとき、何かが私に引っかかり、自分の破片が毎日のどこかに引っかかっているような、そんな感じがしています。

「掌握できないことは、日常的に私の近くにあり、その掴めなさから、同時に遠くにある」と、以前自分の個展^{*}に言葉を添えました。

絵を描いているとき、私は近くのことを思い出し、その絵を眺めて、遠くのことを考えています。

2022年8月

※2022年1月「近接遠眺」(CLEAR GALLERY TOKYO)



古山結《唄い群れ》2022年／木製パネル、和紙、岩絵具、水干絵具／130.3×130.3cm

古山結 | インタビュー

ー日本画材を用いた制作

初めて日本画材に触れたのは、高校生の頃です。ざらざらした絵具の粒が水を含んで動き、筆から画面へ移っていく感じに惹かれました。粒子が均一でなく、素材もばらばらで、一つひとつが「描かれるためのより良い画材」としては存在していないような感じで、違う物質同士を混ぜたり、貼り合わせたりするようなところも面白く思いました。例えば箔は、物質そのものが光沢のある質感を持っている。それを絵具と同じような扱いで使うのが不思議だなと思いました。今私がつくっているものは、「日本画」といわれて想像するものとは、もしかしたら違うのかもしれませんが、近年自分にとって身近なものとして、画材を扱うことができるようになってきたように感じています。

ー「描くこと」と「制作」の違い

博士論文[※]の中で触れているように、私にとって「制作」と、「描くこと」では少し隔たりがあります。幼少の頃から行ってきた「描くこと」では、多少使い方を教えてもらうにせよ、自分なりの扱いで画材を使っていましたし、身近な存在としてありました。でも大学で学ぶとなると、いい意味でも悪い意味でも、他の人がやってきたものを学び、一回自分の中に取り込む要素が増えます。加えて、「発表する」という側面が日常的になることで、自分が思っていた「描くこと」一つくるものとかつくることーと「制作」がずれているように思えました。「制作」に取り組もうとすると、「描くこと」とは少しずつずれていく。自分の中にあるものと距離があったり、違和感を感じたりするものを発見して、その「ずれ」が制作を進

める動機になるような気がします。自分の「制作」を「描くこと」一日々描いたりつくったりするものーに繋げて、近づけていくと、見る人や客観的な視点とは、逆にずれていくところも面白いと思います。

ー“ずれ”

私は多分、「ずれる」ということに対してポジティブなイメージを抱いています。例えば人と話していても、会話の中で、相手と自分とでは違うものを想定していることがあります。そこで違いというか、輪郭が分かるような気がしませんか。私や、あなたの輪郭。他者の中で前提とされていることと、逆に私があたりまえだと思っていることとのずれを、発見して面白がりたいたいという気持ちがあるのかもしれない。

ー変形の支持体をつくる理由

そもそも四角である必然性があまりないと思います。支持体の形が変わってそこに影が落ちたり、厚みが変わって軽さを感じたりということは、私にとっては絵の要素のひとつです。私にとっての絵は、ある種の言葉のようなもので、その言葉には粒のようなイメージがあったりするのですが、それらを見せる際に、画面の中に没入して見てもらうというよりは、「そのもの」[「物体自体」]を眺めて、捉えて欲しいと思うところがあります。あとは単純に、制作の最中、面白そうなことが思い浮かんでいるのにそれを試さないという選択肢は、私にはありません。

ー制作行為と表す／表されたものとの関係性

行為の中で行う決定や、表されたものが“自ずから”生まれやすい状態をつくるということが、私の制作の核になっています。これは絵だけに限らないのですが、何かをしようとして、それをしている時、実際にした後に、やりたいことがずれていく感じがあります。その中に、「ずれの旨味」みたいなものが生まれいている気がします。何か“自ずから”出てきてしまったような、よく分からない旨味。その旨味を、そのまま見せられたらすごくいいなと思っています。「私がこう考えたよ」ということよりも、「出てきちゃった何か」を一緒に楽しむことが出来たり、拒絶されたりすることが面白いと思います。制作の時は、意識的に言語化しないようにしているので、表しているものについての説明はなかなか困難です。ただ、結果的に私が触覚的に感じたものや肌感覚など、「体感」に関わるようなものを描くことになっている気がします。自分が落とした何かを集めて並べていったら、自分が見ているものの周りの輪郭を探っていくようなことになるのではないのでしょうか。

ー削り取り、引っ搔く行為

元々、引っ搔くことは結構好きでやっていたのですが、引っ搔くことと描くことは、つくる側の身体行為からすると結構似ていて、固いもので筆圧をかけると、結果として引っ搔いた表現になっていたりします。それが今、支持体・パネルをつくる時に削り取る行為と混ぜこぜになってきているのだと思います。二つの行為が分かれていた時期もあったのですが、支持体をつくることも絵を描いているように感じることもあり、支持体を削って、また中も描いて、というように行き来することが増えてきました。

ードローイング、描くこと

ドローイングは制作よりももっと些細で身近な行為に思います。制作は自分が日々過ごしている中で起きたことの集積、総体に近いものが出てくることが多いですが、ドローイングは今日はとても暑かったとか、おいしいものを食べたとか、そういうものが反映されていたりします。その中に、総体的なものも紛れていたりするのですが、もっと即興的というか、より早くて近いものという感じですね。私には描くことがあってよかったと思います。描くことがあるおかげで、色々なことを理解したり距離を確かめたりすることがしやすくなっているのだらうと思います。

一人の形

私は基本的に人のことが好きで、自分も含めて人って面白いなと思っています。だからといって色々な人種、年齢の人が作品に出てくるわけではないのですが。日常の中で人との関係性で気づいてはっとすることがあり、そういったものが絵の核になることが多いので、私の中の基本的な思索の対象として、人との関係性があるのだと思います。人のモチーフを、自分が体感したことを表すために描く感じです。



古山結《ぬかあめ》2020年／木製パネル、和紙、岩絵具、水干絵具／173.0×235.0cm

今回行う小山衣美さんとのイベントにも関係しているのですが、人は色々な形をしているんですよね。大きかったり小さかったり、ぐねぐねしてたり、柔らかかったり硬かったり。そういう人たちは、生きていて動いてる。それは自明のことなのですが、描こうとするとそのことが薄れてしまう。その違和感が面白く、関心があるものとして人が出てくるのかもしれないです。また、制作で自分の「体感」を表していることが多いとお話しましたが、それは自分の身体で触れて感じたことなので、状態を表すモチーフとして人が出てくるというのもあると思います。

ータイトル

タイトルは全部つくり終わってから考えるようになってきました。作品と合わせた時にぼんやりとイメージが伝わる程度の言葉に留められるといいなと思っていますが、なかなか難しいです。

ー「世界をとりとめる」

最初に目にした時、私の制作への向き合い方と近い、親しみがある言葉だなと感じました。世界というと大きなもの、あらゆるものを包括した全体のように感じますが、フォーカスしていけば小さなひとつのものやこと、人が構成している。私たちは普段自分の視点から見て触れている世界から、逃れることはできません。でも、人の世界を想像したり垣間見ることはできる。私の世界は誰かにとっては知らない世界けれども、重なる余地はあったりする。そうして、色々な人の世界(視点)が重なって世界はできているようにも思うので、その場所場所を見ていくような言葉でいいなと思います。

ー今後の活動

どうなっていくのかは分かりませんが、行きつ戻りつできる状態でいることが重要だと思います。今は抽象的だと言われるような表現になっているかもしれませんが、今後もしかしたらキュッと明確に分かりやすいものになっていく可能性もあって、その可能性を留めたまま制作をしたいです。それが私の中では自由になること、制作の幅を広げることだと考えていて、大切なことだと感じています。

2022年7月2日 東京藝術大学上野校地アトリエにて
聞き手・編集：齋藤里紗

※『往来する身体』2021年3月、東京藝術大学博士号（美術）取得論文



古山結《探さないでください》2022年／木製パネル、下地材、岩絵具／23.7×23.7cm



撮影：黒川ひろみ

大崎清夏 OSAKI Sayaka

1982年神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。2011年、ユリイカの新人としてデビューし、第1詩集『地面』を刊行。第2詩集『指差すことができない』（青土社）で第19回中原中也賞受賞。第4詩集『踊る自由』（左右社）で第29回萩原朔太郎賞最終候補。その他の著作に詩集『新しい住みか』（青土社）、絵本『うみのいいもの たからもの』（山口マオ・絵／福音館書店）他。舞台公演や映像作品等、他ジャンルのアーティストとの共作も多数手がける。女子美術大学非常勤講師。

<https://osakisayaka.com/>



小林達也 KOBAYASHI Tatsuya

1973年神奈川県生まれ。1998年筑波大学大学院芸術研究科美術専攻修了。自作のパネルに、カゼインテンペラを主としてアクリル絵具や色鉛筆、クレヨン等多彩な画材を用いて制作をおこなう。主な個展に「大きな線もしくは星」（2021年、GALERIE PARIS／神奈川県）、「立って歩く」（2009年、トーキョーワンダーサイト本郷／東京）、グループ展に「桐生のアーティスト2020」（大川美術館／群馬）、「VOCA展2007」（上野の森美術館／東京）他多数。

<http://tatsuyakobayashi.com/>



古山結 FURUYAMA Yui

1991年愛知県出身。2021年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻日本画領域修了、博士号取得。自身で制作する矩形にとらわれない支持体に、日本画材を用いて制作する。主な個展に「端境に立つ」（2022年、ts4312／東京）、「近接遠眺」（2022年、CLEAR GALLERY TOKYO）、グループ展に「シェル美術賞2020」。2018年、東京藝術大学大学院修士課程修了制作作品大学美術館買上げ。シェル美術賞2020入選。

<https://www.instagram.com/frymy000/>

新・今日の作家展2022 世界をとりとめる

2022年9月17日（土）—10月10日（月・祝）

10:00–18:00（入場は17:30まで）

横浜市民ギャラリー 展示室1、B1

入場無料 会期中無休

主催：横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）

〔関連イベント〕

◆仕草のドローイング「動きのなかにあることば」

古山結×小山衣美（ダンサー）

9月19日（月・祝）14:00–14:30

会場：展示室1

◆対談「私たちは、星だろう」

小林達也×田中龍也（群馬県立近代美術館学芸員）

9月24日（土）14:00–15:30

会場：4階アトリエ

◆対談「生き延びるための遊び」

大崎清夏×永井玲衣（哲学研究者）

9月25日（日）14:00–15:30

会場：4階アトリエ

◆学芸員によるギャラリートーク

10月2日（日）14:00–14:30

会場：展示室1、B1

担当学芸員：齋藤里紗、河上祐子

デザイン：小野寺健介（odder or mate）

印刷：山陽印刷株式会社

翻訳（別紙）：平野真弓

インタビュー映像制作：播本和宜、田中良佑

告知動画制作：伊藤浩平

編集・発行：横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）

〒220-0031 横浜市区宮崎町26番地1

TEL 045-315-2828 FAX 045-315-3033

<https://ycag.yafjp.org/>

© Yokohama Civic Art Gallery 2022

